

会 長 あ い さ つ

国際理解教育の充実に向けて派遣教員に期待するもの

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 檜山 美則

平成22年度より大塚雅夫前会長の後を引き継ぎ会長を務めています。大塚会長は本会を今までの日本人学校帰国教員の会から、国際的に活躍できる人材育成を支援すべく国際理解教育に力を入れた組織に改革されました。その流れを私なりに発展させていきたいと思えます。

茨城県から派遣された教員は300人を超え、今年度帰国された先生は25人になります。平成16年度には校長だけで5人が派遣されています。これは、全国的に見ても大阪に次いで2番目でした。教員数を比べると、茨城県からの派遣教員数は全国でもトップレベルと言えるでしょう。茨城県から派遣教員が多い理由は、文科省の担当者に伺ったところ、教員が小中学校の経験をしており、小中併設の日本人学校のニーズに合っていることがあるようですが、何よりも今までに派遣された先生方の実績が評価されてきたことによるとのことです。派遣教員の皆様へ改めて敬意を表したいと思います。茨城県が多数の派遣教員を送り出している背景には、教員に海外での指導経験を持たせることにより、帰国してからの教育活動に生かしてほしいという期待があります。帰国教員の責任として、児童生徒への国際理解教育等への貢献が強く求められており、また、窓口としての茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会への関わりを積極的に持つことが派遣教員の義務であると思えます。帰国教員の歓迎会や帰国報告会を最後に本会との関わりを絶ってしまう教員がいることに寂しさを感じます。本会は以前は水戸を中心に活動していましたが、現在では事務所単位に5ブロックの支部に分かれて日常的にはブロック単位で活動しています。支部ならば知り合いが多いので出席しやすく参加者も増えてきました。

海外子女教育の現状について述べますが、

在外教育施設においても、教育環境を取り巻く厳しい目があり、これまで問題にならなかったことを関係者や保護者が問題としてくるようになりました。派遣教員数については、財政難のために減らす方向です。茨城県は今まで全国でも有数の派遣教員を送り出していましたが、今後減少させるとの方針です。今後の派遣教員については、昨年度より開始されたシニア教員の派遣やシニア校長の派遣が増えそうです。また、日本人学校専任教員の派遣も増えつつあります。この制度は、文科省の派遣教員ではなく現地採用教員としての採用になります。海外子女教育振興財団で募集し採用された教員を、財団が支援して派遣するものです。また、JICAからの派遣教員も募集されていますが、これは国際協力や国際援助の仕事でJICAの事業に参加することになります。いずれも現職の教員には難しいものが多いです。茨城県の帰国子女は、平成19年度に219人を超え、全国で10位になりました。近年企業等の派遣期間が長くなっており、それにつれて帰国子女の数も増加しています。日本人学校や補習授業校より現地校やインターナショナル校への進学者が増え、日本語指導の必要な帰国子女が増えていきます。

国際理解教育への支援につきましては、本校では、学区内の小学校との連携の一つとして、小学校英語活動への支援を行っています。これは、英語担当教員とALTが小学校へ行き、英語活動の授業をすることにより、英語専門の教員がいない小学校での英語活動を支援する目的で行っています。以前勤務した小学校では、英語活動に不安と負担を感じている教員が多くいました。社会や経済のグローバル化が急速に進展し、国際的に活躍できる人材の育成が強く求められていますが、「外国語活動」が目指すものは、主に英語を通し

てコミュニケーション能力の素地を養うことです。言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、英語を中心にしながら幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うことが大切です。そのための経験やノウハウを持っている帰国教員の活躍する場はたくさんありそうです。

夏休みに行われている実践研修会では、2年前より JICA 筑波を会場にしています。昨年度より JICA 筑波の後援をいただいています。国際理解教育の実践ということで JICA

筑波の所長よりご支援とご協力をいただいています。県の義務教育課とも連携が進み、5月の帰国歓迎会には本多課長、梅里管理主事、塚谷指導主事の先生方が出席してくださいました。

海外での貴重な経験を持った私たちが、組織を生かし、国際社会に貢献できる児童・生徒の育成のために力を合わせて貢献していきましょう。学校に閉じこもって貴重な体験を思い出に終わらせることがないように、会には進んで参加して交流や親睦を深めていただきたいと思います。

本年度帰国された先生方からの報告

リヤド日本人学校（サウジアラビア王国）
における教育活動

神栖市立矢田部小学校 校長 高田達男
前リヤド日本人学校勤務

■学校の概要■

アラビア半島の大部分を含めるサウジアラビア王国は、日本の約6倍の面積を持つ国である。この国は、国王のもと、シャーリア（イスラム法）を憲法に掲げる絶対君主制の国である。人々の生活は、イスラムの伝統的習慣を守りながら営まれている。世界全体の26パーセントを占める石油の確認埋蔵量があり、世界経済の安定化に寄与している。石油がもたらした富により、都市部を中心に近代化が進められ、新しいビルや巨大なショッピングモールが増え続けている。近代化したリヤドの町であるが、少し郊外へ出ると広大な砂漠が広がっている。また砂漠周辺をラクダが歩き、都市部とは違った世界を見ることができる。サウジアラビアの教育制度は、日本と同じ六・三・三制で、小・中学校の9年間義務教育である。日本の教育制度との違いは、公立学校の授業料が小学校から大学まで無料であることと、コーランの教えに従い、小学校から男子校と女子校に区別されれていることである。授業の全てアラビア語で行われている。そのため在籍する児童生徒は、サウジアラビア人がほとんどである。現在、リヤド市内で本校以外に日本人生徒が、就学している学校として、アメリカンスクール、オーストラリア系のマルチインターナショナルスクールなどが挙げられる。これらの学校ではESL（英語を母国語としない子どもたちへの特別指導）も行われている。サウジアラビア王国リヤド市に位置するリヤド日本人学校は、1985年に開校して、現在24年目を迎える。

る。小学部と中学部からなっている。児童生徒数は、創立当時、小学部の22名からスタートして、1987年度には、37名の在籍児童数となり、その後は、25名から15名、テロ事件が起きた2003年には8名に減少したが、その後徐々に増え15名から25名の在籍となっている。

学校教育目標を「調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成」として、教育方針を社会の変化に対応できる「21世紀に生きる児童生徒の育成」を目指して、創意と工夫に満ちた教育に努める。更に、在外教育施設として特色ある学校づくりを目指して、知・徳・体の調和のとれた教育に努める。

- ①心豊かで、たくましく生きる児童生徒の育成を目指す。
- ②自ら学ぶ意欲と環境の変化に対応できる能力の育成を目指す。
- ③日本国民としての資質を養い、特性に応じた教育の充実に努める。
- ④日本とサウジアラビア王国の文化と伝統を尊重する態度を育て、国際理解を深め、日本人としての誇りをもたせる。

平成21年度の努力事項及び実践事項では、国際性豊かな児童生徒を育成するために、

- ①英会話の時間の充実に努める。小学部と中学部において週2時間を実施する。
- ②アラビア語の時間を設定する。小学部3年生以上に週1時間を実施する。
- ③交流学习を実施する。現地校及びコリアンスクール他インターナショナルスクール等との交流学习を実施する。
- ④現地理解教育の推進を図る。見学学習、工場見学、ドイツ農園での持久走記録会、写生会を実施する。現地理解教育の講演会を実施する。

■ 交流学習と現地理解教育の実践例 ■

【交流学習会】

コリアンスクールとの交流学習会

1 目的

- (1) 日本文化をコリアンスクールの児童生徒達に工夫して紹介することにより、児童生徒のコミュニケーション能力を高める。
- (2) 同世代のコリアンスクール児童生徒達と、遊びやスポーツの文化交流を通して直接交流することにより、相互理解を深める。

2 日程 2009年11月11日(水)
9:00~12:00

3 会場 リヤド日本人学校

4 参加者

- ・リヤド日本人学校児童生徒 19名, 教職員5名
- ・コリアンスクール児童生徒13名, 教職員8名

5 当日の日程及び内容

○ 開会式

- (1) 歓迎のことば(英語, 日本語, 一部韓国語) 中学部2年生
- (2) 国歌斉唱及び国旗掲揚(韓国, 日本)
- (3) 日本の遊び紹介 ・めんこ, 折り紙, 福笑い, けん玉
- (4) スポーツ交流 ・転がしドッジボール
- (5) ランチタイム ・ホットドック, ポテト, スパゲティ

○ 閉会式

- (1) お礼のことば(英語, 日本語, 一部韓国語)
・日本人学校児童生徒代表 中学部2年生
・コリアンスクール児童生徒代表
- (2) 合唱「アリラン」
- (3) 記念撮影
- (4) 閉会のことば(英語, 日本語, 一部韓国語)
・日本人学校児童生徒代表 中学部2年生



《折り紙で楽しむ》

6 コリアンスクール視察

・2009年4月4日(土)・9月7日(月)
視察したコリアンスクールは、児童生徒数13名前後の小規模の学校である。予算的にも

厳しい状況にあり、リヤドにおける借地料の高騰もあり2009年には、敷地面積の狭い場所へ移転している。政府から派遣された教師は、校長の一人だけである。他の教員は、ボランティアとして各企業等の女性が指導に当たっている。教育課程の学習内容の増加に伴い、授業時間の確保が重要課題となっている。交流学習の実施に当たっても、授業時間を削減しての実施については、困難な状況になってきている。この様な状況で、平成20年度は、交流学習が実施出来ない状況になる。隔年で互いの学校において実施することで、交流を続ける方向で話し合うことができ、平成21年度は、リヤド日本人学校で、交流学習会を実施して、平成22年度は、コリアンスクールにおいて、リヤド日本人学校の児童生徒が訪問することになっている。

7 平成21年度交流学習会を終えてコリアンスクール校長よりのメッセージ

・ Thank for your warm hospitalities. I think and believe, we take a small step to build up relationship between us. Futhemore my students and yours in our future can make friendship each each other.

I'll never forget what you did at th eevent day. My students can enjoy many exciting activities and get through Japan in Riyadh.

Fom what I've seen, you do a lot of things for this event. So I want to pause to thank you for many hours of patient and seifless work.

Japanese students, remember to tell your teacher how much you thank them.

Next year I'm sure we will be able to join hands and sing together in the spirital of all Friendship. I am going to inform you of exact year schedule as soon as soon as possible (I think it may be near the 5th f May) " Thank you for considereation and help ! "

8 まとめ

サウジアラビアにおける、学校間の交流は、イスラム教による宗教上の問題がある。サウジアラビアにおける、男女の行動は互いに規制され、学校においても、男子と女子は完全に分離して教育が行われている。女子の学校には、日本人学校の児童生徒も女子のみが許される。引率教員も女性の教員の引率となる。リヤド日本人学校においては、派遣教員には女性教員の派遣はないため、訪問が出来ない状況である。男子の学校には、男子だけが許される。男女共学の日本人学校においては、サウジアラビアの学校との交流は、条件に厳しいものがある。コリアンスクールは、男女

共学であり、学校規模も比較的リヤド日本人学校と同じ規模であるため、全校児童生徒の交流がお互いにしやすい状況である。日本と韓国とは、隣国でありお互いがサウジアラビアにおいて友好を深め合うことができることは、将来の日本と韓国と相互理解に大切な学習の機会となっている。

【現地理解教育】

1 目的

- (1) イスラム文化圏の生活に興味を持ち、日本の文化との違いを考える。
- (2) 日本とは異なる文化を知ること、異文化を尊重する態度を養う。
- (3) サウジアラビアの昔の遊びを体験し、理解を深める。

2 日時 平成21年10月7日(水)

3 講師

イブラヒム氏(サウジアラビア内務省勤務) キングサウド大学の日本語学科をご卒業して、三菱電機に5年間勤務する。その後、サウジアラビア内務省の郵便局部に勤務をしている。大学生の時には、よくお友達と一緒に、日本人学校へ来て、子どもたちとカルタなどをして遊んだ経験がある。

4 内容「サウジアラビアの昔の子供の遊び方」

サウジアラビアの昔の子どもたちの遊ぶ方は、教育のためにとっても役にたった。サウジの町によっては、遊び方が変わります。当時の遊びは、頭を使ったり体を使います。

「ダンナーナ」円い形をした車輪を長い棒を使って走らせながら、倒れないようにコントロールしながら遊びます。

「ウモテサ」九球ゲームです。このゲームは2人で遊びます。9個の白い玉と9個の赤い玉をそれぞれのプレイヤーが持っています。四角い板の上に同じ色の3つの玉を列にしたら相手の玉を1個取ります。これを繰り返して、相手が2球しか残らなくなった人が負けになります。

「ケーラム」インドから伝わってきたゲームです。現在もこれで、遊んでいる人もいます。四角い板の四隅に穴があるゲーム版を使います。2人から4人で遊べるゲームです。ビリヤードと似ています。中央に置かれた赤

(50点)、茶(10点)黒(5点)の三色の木製コインを、4人が順番に、はじき専用のコインを一指し指ではじき、三色の木製コインを四隅の穴に落とすと自分のものになるという遊びです。どのコインを狙うかよく考えることが必要です。ケーラムの遊びを実際に教えて頂き、子どもたちは、サウジアラビアの子どもの気持ちになって遊ぶことができま

した。



《イブラヒム氏》



《ケーラムで遊ぶ》

5 まとめ

講師として、サウジアラビア生まれでサウジアラビア育ちの根っからのサウジアラビア人であるイブラヒム氏に講演をお願いした。キングサウド大学の日本語学科で学ぶことから日本人との関係が長く続いている。リヤドに住む日本人が200人前後であるが、イブラヒム氏は、学生時代から日本人学校を訪れているため、派遣教員との長いつながりもある。サウジアラビアで育ったイブラヒム氏による、「サウジアラビアの昔の子どもの遊び」の話と、実際に遊んでみる体験を通して、サウジアラビアの子どもの遊びの歴史を知り、現代のサウジアラビアの子どもの遊びとの違いも知ることができました。

雑感(マレーシア)

水戸市立第四中学校 教諭 檜山 和寿
前クアラルンプール日本人学校勤務

3月18日マレーシアのクアラルンプールから帰国しました。東京には19日朝7時ぐ

らいに到着しました。

外は小雨の降る天気でした。肌寒い空気が大変懐かしく感じました。そして、周りであつうに日本語が話されていたり、看板や掲示板が日本語で書かれていたり、日本語の情報があちこちにあふれていることが大変新鮮でした。

3年ぶりに帰ってきた日本ですが、マレーシア(クアラルンプール)と比べ大きく違うなあと思ったことが、5点ありました。

1点目は、先ほども挙げたことと関連しますが、街中の英語の情報量が日本は少ないということです。マレーシアは、マレー語が第1言語です。しかし、以前イギリスの植民地であったため、英語がよく使われています。また、多民族国家のため他民族間でのコミュニケーションは主に英語で行われています。(マレーシアに住んでいる民族は多数いますが、主にマレー系、中国系、インド系がマレーシアに住む3大民族と言われており、各民族で、独自の文化を発展させています。宗教も、マレー系がイスラム教、中国系が仏教、道教、キリスト教など、インド系がヒンドゥー教、キリスト教などを信仰しています。元々マレーシアにはオランアスリという起源がアフリカと推測されている民族が住んでいました。現在も5万人ほどマレー半島の山岳部に住んでおり、彼らの中には、未だにほとんど外部との接触を行わず、電気も電話もない生活をしている人達もいます。また、彼らは主に狩猟・採集生活を営んでおり、自給自足の生活をしています。身分制による階級社会が残っている民族でもあります。山岳地帯をドライブすると、ときどき「ゲゲゲの鬼太郎」が住んでいる家と似たような家の集落を目にします。そこが彼らの家です。主に大きな植物の葉で家が作られています。話が長くなってしまいましたが、そんなオランアスリの住んでいるマレー半島に、インドネシアから渡ってきた民族がマレー人です。ですので見た目はマレー人もインドネシア人も日本人から見るとほとんど区別が付きません。また、インドネシア語もマレー語もほとんど同じです。そして、18世紀にたくさんの中国人がマレーシアへ主に労働者としてやってきました。そして19世紀にたくさんのインド人が南インドからやはり主に労働者としてマレーシアへやってきました。彼らは、主にスズの採掘、ゴムのプランテーションの労働者としてマレーシアで生活を始めました。)そのため、英語のレベルは様々なようですが、ほとんどの人が英語を話せません。都心から離れた山中に住んでいる人も英語をじょうずに話しており、英語がよく使われていることを痛感しま

した。また、今後変わっていくという話も聞きましたが、公立学校では英語と、理科、算数がオールイングリッシュで行われています。また、小学5年生の英語の授業でしたが、教科書を見せてもらおうと日本の高校1年レベルの内容を勉強していました。街中の看板や放送などもよく英語が使われており、「英語」に囲まれて生活していたのだなああと日本に帰って痛感しました。

2点目は、日本にはほとんど日本人しかいない、ということです。当たり前といえば当たり前ですが、そして、先ほど述べてきたことも重なりますが、マレーシアは多民族国家であったため、その中で3年間過ごして日本へ帰ると、日本にいた頃は当たり前だった感覚が逆に少し違和感を覚えました。日本で生活を始め早4ヶ月。今はそういった違和感は消えましたが、はじめは、ちょっと不思議な感じがしました。マレーシアは多民族国家として3大民族が住んでいると述べましたが、それ以外にも出稼ぎ外国人労働者が多数暮らしています。インド人、ミャンマー人、インドネシア人、バングラディッシュ人などが多数働きに来ています。また、マレー人の方々、特に女性は、マレーシア独特の民族服を着ているケースが多くさらに頭にはトゥドゥンといってイスラム系の女性が被るかぶり物をし、髪を見せないようにしています。そういった点でも、日常見かける人々の様子はだいぶ日本とは違っていています。そういったたくさんの民族が住んでいるマレーシアですが、マレーシアに長く住んでいると、逆に日本のような単一民族からなる国の方が特殊なのかもしれないと感じるようになりました。

大きな違いとしてあげた1点目と重なりますが、このような状況では、自分の言語だけを使っていけばいいという考えでは、うまく生活はしていけません。そういう状況が、必然的に英語を使わざるを得ない状況となり、それが、多くの人々が英語を話せることにつながっているように感じました。

3点目は、海外との心理的距離が日本は遠い、ということです。実際マレーシアは地理的にもタイと接していたりシンガポールもクアラルンプールから飛行機で45分ほどで行けたりする距離なので実際の距離としても日本よりも海外が身近であるといえます。ただ、そういった実際の距離だけでなく、考え方も大きく違っていると感じました。それは、自分の人生の選択肢の中に「海外へ出て行く。」という選択肢を多くの人が持っているということです。知り合いになった現地の方々のうちかなりの割合の人々が、留学をしたり、海外で働いている親戚がいたり、実際働

いていたことがあったりしたケースがとても多かったです。この流れは、特に中国系の人々に多く見られます。インド系もそういったケースは見られますが、マレー系はあまりそういった話を聞きませんでした（自分の知り合いの範囲でのものなので正確なものではありませんが、。）とにかく、日本よりは、かなりの割合で海外へ出て行っている雰囲気を感じました。

そして、主な留学先はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアが多いようでした。また、職場としてもアメリカや、オーストラリア、中国などをよく聞きました。仕事としては、医師、レストラン経営、ホテル経営、会社員などの話を聞きました。

この話を聞いて感じたことが2点あります。1点目は、海外へ多く出ている民族が中国系とインド系です。彼らは、華僑、印僑と呼ばれる海外で仕事をし、収入を得る人達が多く存在する文化を持っています。やはり、その文化が、マレーにいる中国系マレー人、インド系マレー人にも同じようにあるのではないかということです。また、2点目としては、今回多く出ていることですが、彼らは英語をよく話せる、ということです。マレーシアにいる3大民族の中で、特に中国系とインド系は上手に英語を話せる人が多くいるように感じます。私の勤務していたクアラルンプール日本人学校にはECとって週2時間オールイングリッシュの英会話の授業がありました。その講師は現地の英語を第一言語として生活している人々でしたが、ほとんどが中国系のマレー人かインド系のマレー人の人達でした。このような文化的背景と、実際の英語力が日本に比べ海外に対する心理的距離が近い要因になっているように感じました。

4点目は、小さな子供に対し日本人はあまり、関わらない、ということです。私は0才の子供を連れてマレーシアへ赴任しました。そして、同僚の先生方の中にも小さなお子さんを連れて赴任してきた先生が多数います。その方々が口をそろえていっていたが、マレーシアの人達は、子供に対し、優しいしよく面倒を見てくれる、ということでした。デパートのエレベーターに乗ると、見ず知らずの人が、自分の息子をよくあやしてくれたり、狭いエレベーターの中ベビーカーで入っていてもいやな顔一つせず、にこにこした笑顔で対応してくれました。レストランなどでもこちらが食べている間、子供をあやし面倒を見てくれたりしました。そのため、大変心地よくマレーシアで過ごすことができました。また、子供に対してだけでなく、マレーシアの人達は、大変穏やかで、いつも笑顔

を絶やさず、とても優しい、という印象を受けました。3年間の生活の中で、マレーの人が怒っている姿をほとんど見たことがありませんでした。この印象も私個人だけの印象ではなく多くの同僚が話していた感じていたことなので、そういった傾向は実際にあると思います。

これらの傾向は、日本人が優しくない、子供に対する面倒見がよくないと言うことに直結することではないと思います。たぶん日本人も、マレー人と同じような気質を多く持っていると思います。しかし、そういったものを出しにくい雰囲気がどこかにあるように思います。私自身もマレーシアでは、相手の名前を呼んで、自然に挨拶できていたりしたのですが、こちらに帰ってきてから、なぜか知り合いに挨拶するときマレーシアでしていたときよりも、何となく気恥ずかしさを感じるようになりました。しかし、マレーシアの上記の点はできるだけ見習っていきたく感じています。

5点目ですが、日本は宗教や、神を信じている人が少ない、ということです。あくまでも印象ですが、日本以上に宗教的なものを大切にしていることを感じました。それは、宗教的行事の様子であったり、話の中で、ふつうに神の話になったり、同じく話の中で、神の存在を信じているといった話になったりすること等からそういったことを感じました。車に神様の絵を描いたステッカーを貼っている人達もたくさんいました（ヒンドゥー系の人が多いです。）。日本と比べそれがいいかどうかは分かりませんが、神が精神的支柱になっている人が多いと感じたマレーシア生活です。実際日本の学習指導要領のようなものの中には、道徳に関して、「神の存在を信じなさい」という項目もあるようで、日本との違いを感じました。

以上、マレーシアから日本へ帰ってきて感じたことを思うままに述べさせていただきました。

国際理解教育と関連して、英語教育の重要性が叫ばれている昨今ですが、マレーシアの英語力の高さは環境の要因が大きいことを感じました。習ったことを即日常生活で役立てられるという環境もより英語が身につけやすい状況にあるといえます。それと同じ環境に日本をするということは、現状では無理ではありますが、やはり少しずつでも英語というものを身につけていくことは必要ではないと感じました。海外では英語が話せるのは当たり前という雰囲気の国が多いのも事実です。マレーシアはもちろんそうですが、マレーシアほどではないにしても、自分が訪れた

近隣の東南アジア諸国は日本よりは英語が通じやすいと感じました。世界はグローバルしていると言われていています。そういった中で上記の事実は常に頭に入れて先を考えていかなければならないと感じています。ただ、全員が難しい英語をペラペラ話せるようになると言うことではなく、アジアの国を見ていると、とりあえずまずは、簡単な日常会話ができる、そういったレベルの英語力をつけていけばいいのではないかと感じました。そのような基礎ができて初めて、より高い英語力が少しずつ身についてくるように感じています。

またマレー人の方々の穏やかさで大変心地よい3年間を過ごすことができました。そのことに感謝するとともに、先ほどの道徳の指導内容のなかで、「神を信じること」と同様マレーシアの中で力を入れて指導している内容が「寛容の精神を持つこと」（多民族国家であるため他民族に対する寛容さがないと国がうまく機能しないという現実があるようです。）だそうです。これに関しては、日本でも大切な内容でありこういった精神を持つことの大切さを改めて感じることでできたマレーシア生活でした。

まとまっていない内容ですが、以上がマレーシアから帰ってきて感じた私の雑感です。

タイ王国に感謝

神栖市立神栖第一中学校 教諭 田村 学
前バンコク日本人学校勤務

タイの教育制度は、6-3-3制で、初等学校6年間、前期中等教育3年間、後期中等学校3年間となっている。1997年に「国家教育法」が制定され、2年後の1999年には「新国家教育法」が制定された。2002年の3月からは、義務教育を前期中等学校までの9年間となった。6-3-3-4年制度で、2学期制である。1学期は5月15日～10月1日、2学期は11月1日～3月1日となっている。その年の5月15日までに満6歳になるものは、その年の5月15日に義務教育の第1学年に入学する。初等教育の大部分は国・公立で、法的には満6歳入学と決まっているが、5歳児入学や7歳以降の入学もある。原則的に出席率80%以上の児童が、第2学年、第4学年終了時に評価試験を受け、合格者が各上級学年に進級する。さらに、第6学年終了時には、教育省による評価試験が各地域ごとに行われ、修了証書が交付される。地域間、児童間のレベル格差及び

地域の子どもの貧困などがタイにおける初等教育の問題点として挙げられている。また、都会においては、有名校への越境入学による過当競争が社会問題視されている。

19年度に研修旅行でタイ南部のムスリムサンティタムウラニティ学校へ訪れた。日本の学校しか知らない自分にとってムスリムサンティタムウラニティ学校は、お世辞にも進んだ教育環境という感じではなかった。教室はあるが、照明やエアコンはなく教卓にも穴が空いており、児童の机は長机と長いすであった。水道も共同のタンクが一つあるだけだった。また、イスラムの学校ということで、いろいろな制限があるようで、男女別の教室や、服装もイスラム独特であった。子どもたちは、先生に対してとても従順で、話をしっかりと聞き、言うことをよく聞いてくれた。

20年度にタイ中部のシラチャー補習校へ訪れた。シラチャーには、日本人学校には遠くて通わすことができないタイに住む日本人（二重国籍の子も含む）の子どもたちが通っており、普段はインター校や現地校へ通っている。そして、土・日曜日限定で補習校で授業を受けている。子どもたちが補習校で受けている授業は、日本の塾そのものである。学力をつけるため、あるいはきちんとした日本語（読み・書き）を身につけさせることに重点を置いている。施設内には各教科の教材教具は全くなかった。今回、3年生（8名）を受け持ったが、児童の実態はというと、自分から積極的に発言する子どもが多いという印象を受けた。反面、日本の教育が大事としている規律という面で、いすにじっと座ることができない子や勝手に発言してしまう子も多しと感じた。今回は、補習校の方から、理科の授業をやってほしい、実験を多く取り入れてほしいという点と、はじめの挨拶、終わりの挨拶、発表の仕方等の規律面を指導してほしいということだったので、そのあたりを意識して授業に臨んだ。最初はおしゃべりをしたり、立ち歩く子もいたが、根気強く指導した結果、少しずつ改善され、最後は集中していたし、楽しそうな子どもたちの姿を見ることができてよかった。日本人学校シラチャー校が開校されたことで、日本の教育を受ける機会を得られるわけだが、親としては、今まで通りインター校へ通わせたいという考えが多かった。逆に現地校へ通わせている子の親は、日本人学校へ通わせたいという考えが多かった。

21年度に交流学习でバンコク中心部にあるダラカーム小学校へ訪れた。いわゆる都会の学校で、バンコク中心部の学校環境は、なかなかレベルの高いものであった。パソコン

ルームには最新のコンピュータがずらりと置いてあり、エアコンも備えてあった。教室内もきちんと整備されており、子どもたちが学習しやすい環境にあった。富裕層の家庭が多く、身なりもきちんとしており、しっかりしている子が多かった。

以上、3年間の自分自身の体験から感じたことは、タイの都会と地方都市との教育環境には大きな差があったということである。このことは一概にそうは言えないが、日本の教育現場にも当てはまることで、裕福な子が充実した教育を受けることができ、貧しい子が充実した教育を受けることができない、やはりそう感じた。特にタイは貧富の差が激しいため、裕福な子と貧しい子との教育の差が非常に大きい。しかし、救いだっただけでなく、どこの学校へ行っても子どもたちの目がとても生き生きとしていたことだった。今の日本の子どもたちが忘れかけている気持ちをタイの子どもたちは、しっかりともっていた。私はここタイで、日本の現場で忘れかけていた気持ちを取り戻せた気がする。そんな素敵な体験をたくさんさせてくれたタイ王国に感謝している。

中国との国際交流

八千代町立西豊田小学校 須永 理子
前上海日本人学校虹橋校勤務

はじめに

上海万博でにぎわう中国。今、人も経済も熱い上海で、その中にある日本人学校、虹橋校にて、私は勤務しました。日本の企業進出も多く、上海での日本人の人口も年々増加しています。そのため、虹橋校の児童は、1400人近いマンモス学校です。

そんな虹橋校では、中国という在外施設を生かした特色ある取り組みを行っています。中国の行事を学び、体験したり、中国の小学校との交流をしたりと中国にいるからこそできる活動を行っています。ここ虹橋校での活動が、今後の教育活動に生かせたらと思っています。

【中国の文化を体験】

中国には、旧正月を祝う風習があります。毎年2月上旬は旧正月を祝う春節という祭日があります。

虹橋校でも、春節を味わうために、総合的



な学習の時間を利用して、毎年「チャレンジタイム」が行われています。昨年度5年生では、その春節に行われる「龍の踊り」や「獅子の舞」を鑑賞、体験しました。



新しい年を迎え、今年1年健康で暮らせるようにと、邪気を追い払うためのものだそうです。

赤と黄色を基調にした色は、中国では、とてもおめでたい色とされ、よく見かける色となっています。

子ども達は、実際に、龍の踊りや獅子の舞を鑑賞するだけでなく、獅子の中に入り、歩き廻り、春節気分を味わいました。

また、湯圓(タンユェン)作りにも挑戦しました。お正月に里帰りして、家族みんなで食べるおしるこのようなものです。餅の中には、ごまの餡が入っています。



子ども達は、実際に、白玉粉を使って、丸くこね、熱湯を通します。また、餡として、ごまやチョコレートを使い、おいしく食べました。また、事前に、春節について調べ学習を行いました。そのため、1つ1つの催し物を理解した上で行った体験活動だったため、とても有意義な時間を過ごすことができました。

【中国にある協和小学校との交流】

○ 子ども達の実態

開放的な校庭、音響完備のあるホール、ピアノを練習できる個室など、子ども達の自主性を尊重できる施設の充実さがありました。

この協和小学校は、音楽専門の学校です。そのため、個室のピアノ部屋やホールなども充実しています。



協和小学校の子ども達は、とてもさわやかにあいさつし、周りの友達とも笑顔で会話をしていました。学校で定められた制服を着て、静かに礼儀正しくいすに座っている様子に、穏やかな生活ぶりを感じました。

交流の内容は、日本人学校の子ども達と一緒に、中国結びや京劇のお面作り、少林寺など、中国の遊びや文化に触れ、学びました。中国語で説明する先生の話の聞き、案の定分からないため、協和小学校の子どもたちが、言葉が通じなくても、手をとりながら親切に教えてくれました。そのため、みんな自然に笑顔がこぼれ、言葉の壁を越えたような体験をしました。

【呉溪第三小学校の先生方との交流】

日本では鉛筆を使いますが、中国は、毛筆で行っています。3年生から万年筆の授業もあり、中学でも試験では、万年筆またはボールペンで記入することになっています。授業時間は1時間35分。中国では、教育局で決められたテストや教科書を使っていました。

国土が広いので、その地域の学力に合わせて、教科書の難易度も異なっているようです。英語は1年生からあり、1日1時間。週に5時間あります。国際教育にも力を入れています。

教師は、教科担任制のため、各教科の専門性が深まり、指導する場合も深みがありました。中国の先生は個人が級制（例えば星がつく）で決められていて、学校側が採用するときの判断基準になるようです。また、中間・期末テストは教員が作り、国語と算数のテストが毎学期行われ、この結果は教科の先生の給料に関わるということでした。

終わりに

在外施設ならではの取り組みに、日本との文化や教育の違いが見られました。また、中国の行事や遊び、風習などを実際に体験する

活動を通して、中国のよさを実感することができました。

父と娘の国際理解

水戸市立双葉台中学校 木村正光
前スラバヤ日本人学校勤務

【娘の見たインドネシア】

『偏見から信頼へ』（～滞在3ヶ月目
13歳の作文より～）

人は誰でも「偏見」というものを持っていると思う。私もそうだった。

インドネシアに対して偏見の目で見ていたことが最近分かってきた。

一つ目の偏見は、経済についてだ。（中略）レストランでもデパートでも、みな普通に携帯電話を使っている。高校生ぐらいの人が持っているのを見るのも珍しくない。私の父が携帯電話を持ったのが数年前だというのに、インドネシアでは携帯電話は一般化していたのだ。

母によると、インドネシアの携帯電話の料金システムは日本と違うようだ。料金の払いは色々あるのだろうが、日本では、契約した会社へ使った分だけの料金を銀行から払っていた。インドネシアでは、先にカードを買うことで料金を払う。このカード料金は、カード会社に電話番号を言うと、その電話番号の携帯電話に料金を送れるようだ。例えば、Aさんがカードを買って、カード会社にBさんの電話番号を伝えれば、Bさんの携帯電話に料金を送ることができるということだ。

このカード購入による料金先払いシステムだと、親が知らないうちに子どもが使った携帯電話の使用料が莫大な金額になっていたということは防げるに違いない。さらに、逆に子どもが自分の年老いた親の携帯電話に電話料金を送って、いつでも連絡がとれるようにしておくこともできる。日本で起きている携帯電話に関わる問題を解決できるかもしれない。日本のシステムがいいとは限らないのだ。

一つ目の「偏見」は「関心」に変わった。

二つ目の偏見は宗教についてだ。

6年ほど前の9月11日に起きた「9.11」を覚えているだろうか。（中略）では、何故あのような事件が起きてしまったのか。それは、国と国との利害の対立が招いた悲劇

なのだろう。政治に宗教が絡んだとき、それは泥沼の戦いになる。政治の対立を文化の対立にしてはならないのだ。

私は今まで、イスラム教や神に対し「偏見」を持っていたため、その神を信じる人の生活習慣にも「偏見」を持っていた。豚肉を食べてはいけないとか、お祈りは1日5回とか、「宗教によって生活が縛られている」と思っていた。しかし、それは違うような気がしてきた。

インドネシアの朝は早い。4時には近くのモスクからアザーン（お祈りを呼びかける放送）が流れてくる。6時10分に私が家を出ると、たくさんの登校途中の小学生・中学生・高校生とすれ違う。車の中で眠い目をこすっている私に比べ、みんなはつらつとして元気に登校していく。そろいのジャージで運動を始めている小学生達もいる。

日本では今、夜遅く寝るために朝起きられず、朝ご飯を食べない小学生や中学生が増えているという。それは逆に、朝ご飯を作らない親も出てきたということだ。4時にお祈りをするインドネシアの人々にとって、親が朝ご飯を作ること、子どもが朝ご飯を食べて学校へ行くことなど、当然すぎるほど当然のことに違いない。日本でなくなりかけている「早寝・早起き・朝ご飯」の習慣は、インドネシアではこれからも崩れることはないだろう。インドネシアの人々が守っているそういう決まり事は、先人から受け継がれてきた知恵なのだと思う。私には、イスラム教が人々の生活を縛っているのではなく、人々の生活を形作っているように見えてきた。きっと、生活習慣が気候や風土に合っているのだ。

二つ目の偏見は「関心」から「理解」に変わりつつある。

三つ目の偏見は、インドネシアの人々の人柄についてである。

父のインドネシアへの派遣が決まった時、総合的な学習の時間などで色々インドネシアのことを調べてみた。その中の一つ「治安が悪い」ということから、インドネシアへの悪いイメージができた。私は「町の中は危険でしょうがない。」と思っていた。言ってみれば「インドネシアの人々は怖い人達」と思い始めていたのだ。

しかし、私の出会ったインドネシアの人はみんな温かくて、優しい人だった。いつもにこにこしているし、言葉が通じなくても不機嫌な顔をしないで、身振り手振りで何とか伝えようとしてくれる。

先日、自然教室（宿泊学習）でバトゥー方面に行った。2日目のトレッキングでバードウォッチングに出かけた。山あいの集落を過ぎ、

村はずれの小学校の側らを通りかかった時だった。休み時間だったらしく制服を着た児童達が外で遊んでいた。カメラを向けると寄ってきたので、みんなで写真を撮った。撮り終わるのを見計らうように、先生がハンドベルを鳴らした。しかし、一度教室に向かったはずの生徒の何人かが戻って来て、私達が見えなくなるまで校庭の高台から体を乗り出して手を振っていた。私は、先生の許しを得てきたのか心配になって、早く授業に戻ると心の中でつぶやきながら、素直に嬉しかった。

3つ目の偏見は、「理解」から「信頼」になりつつある。

インドネシアに来て、来る前に持っていた思い込みが間違いであったことに気づいた。確かに技術は日本の方が進んでいるし、生活は便利だと思う。しかし、ここには、明るく笑顔で暮らす人々がいる。私より苦しい環境の中で暮らしている貧しい人々が、私に優しく接してくれる時、私は、人にとって何が大切なのか考えてしまう。その答えをここで見つけようと思う。

私は今、中学校3年間を暮らすことになるインドネシアを、そして、インドネシアの人々を、好きになれそうな嬉しい予感を感じている。

【父も見たインドネシア】

『犠牲祭（2008年12月8日）』

「ムハンマドの信者アブラハムが進んで息子を犠牲として捧げたことを記念する日。世界中のムスリムによるメッカ（サウジアラビア）への巡礼が行われる。巡礼に参加していないムスリムも動物を1匹生け贄として捧げ、この日を祝う。」

〈近所のモスク〉

運転手のヘリーさんは敬虔なムスリムです。1日5回のお祈り（場所を問わず）と毎週金曜日午後のモスクでの集団礼拝を欠かしません。基本的に金曜日の午後はこのモスクで礼拝してもかまいません。ヘリーさんは、学校にいる時は学校の近くのモスク（東洋一の広さといわれている）で、私の家にいる時はこのモスクで、集団礼拝をすることが多いそうです。

「毎週一度、一所に会して集団礼拝を行う信者達は、礼拝の導師を前に立て、その余の者は貴賤貧富を問わず横列を作って、互いの

肘と肘が接するように並んでともに礼拝を行う。この肘の接触には、兄弟の絆で結ばれた信者達の連帯に隙間風が入らぬように、という象徴的な意味が込められている。」(『中公新書 黒田壽郎著 『イスラーム心』)

〈神に祈りを〉

剣を手にした人のお祈りに合わせてみんなで祈りをした後、首を切り落とします。

〈近所総出の解体作業〉

敬神の念の現れとしての生け贄の多くは山羊で(金持ちは牛を捧げます)、犠牲祭が近

づと、あちこちに生け贄用の山羊の市が立ちます。解体された山羊(牛)は小分けされ、全てのムスリムに分けられます。どんな貧しい人達もこの日は肉が食べられます。イスラム教は唯一神アラーを信じるムスリム達の、モスクを中心とした共同体のようです。

「現世とはムスリムにとり、そこにおける言行が最後の審判の日に秤にかけられ、来世の地位を決定するような試練の場である。」(『イスラームの心』)。

オーストラリアにおける芸術(図工)指導 ー現地校の授業展開を通してー

坂東市立岩井第二小学校 間中則子
前シドニー日本人学校勤務

1 はじめに

昨年度ミックスレッスンの授業展開にとまどいを感じるが多かった。

図工を指導するには、その制作にともなう材料の準備が必須である。しかし、その材料が手に入りにくかったり、どこで購入すればよいのかすら分からないものもあった。日本で今まで指導してきたことをオーストラリアにある材料を使って作らなくてはならないというやむを得ないという状況の下で教材を工夫したという結果になったものも少なくなかった。意図的なものではなかったのが残念である。

また、現地校や美術館はいくつか訪問したが、まだまだオーストラリアの美術(図工)教育を十分理解するまでには、至っていない。

今年度は、本当の意味で現地理解をするためにも学校及び施設訪問を積極的に行っていきたいと考えた。そして、シドニー日本人学校の児童への指導に役立て、変容を見取っていきたい。

2 Ku-Ring-Gai Creative Arts High School

(1) 学校概要及び特色

Ku-Ring-Gai Creative Arts High School は、シドニー郊外の North Turrumurra 地区にある Creative Arts を柱とする公立のハイスクール(Year7~10)である。

今回は、Evening Open Day の日に訪問した。この日は、Creative Arts の授業体験や作品の展示を中心、その他の授業内容も公開され、新入生の獲得に向けての説明や勧誘がていた。このような目的のオープンデーは、オーストラリアのどの学校でも行われている。

(2) Visual Art Teaching Program Year7 - Coordinator : Angela Smith

各学年のプログラムは、教科担当教員が Semester 毎に作成する。このプログラムは、Visual Arts Year7-10 Syllabus に基づいて計画される。授業は、このプログラムに基づいて展開されることはもちろんであるが、それに付随してホームワークも計画

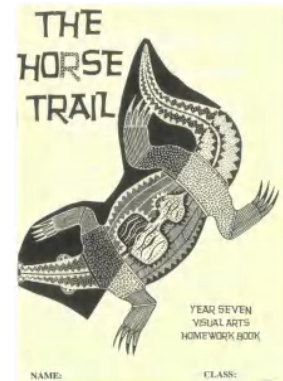


的に 基本スキルが課題として出される。

KU-RING-GAI CREATIVE ARTS HIGH SCHOOL – Visual Art teaching program, YEAR 7, Coordinator: Angela Smith
Year 7 Unit 1, Semester 1.

LEARNING OBJECTIVES	THE COURSE TITLE	ARTISTS	TECHNIQUES	ASSESSMENT	NOTES
4.1 explore the function of and relationship between artist – artwork – audience 4.2 begin to acknowledge that all the elements need different points of view	Conceptual Framework ARTIST WORLD AUDIENCE	Julius Aronson P198-119	What is art? What are artists? How do the agencies of the conceptual framework contribute to an artist's practice? Practice Techniques Linear drawing Pattern making Design techniques: Dot Line Cross Hatching	Conceptual Map + VAPD	
4.1 create a range of strategies to explore different meanings, connotations and associations within artworks 4.2 appreciate the likelihood of different interpretations between artist – artwork – world – audience	Students learn about: The form of visual arts and design as containing connotations, subtexts, allusions and contexts, shaped by different values and needs Students learn to: Investigate the field of visual art and design and appreciate basic connotations, allusions, subtexts and contexts of the field, to enjoy art Students learn about: The function of the artist to make choices, engage or reject Students learn to: Identify and use a variety of line, shape and colour to create artworks Students learn to: Appreciate the likelihood of different interpretations between artist – artwork – world – audience	Archie Monksworks on Salt, Morgan and Michael Nelson Tapawera Shay Dooling Shelagh Clifford Francis Tanya Nichols Lin Onda	Structural Form The structural world arises from systems of signs and symbols that in the structural concept of language in the structural form art may be thought of as those who have ahead and make use of a language and who represent ideas on a system of signs that communicate meaning.	Students to be completed as VAPD	

Year 7 Unit 1, Page 1 1/1/2008



(3) 評価 - Assessment Guidelines -

年度当初に、生徒及び保護者に向けての明確な評価規準が知らされる。

Visual Art 2008 Assessment Guidelines

Art works (70%)

Diary work (30%) - including homework, exams and assignments.

All four terms count equally for half yearly and yearly assessment purposes.

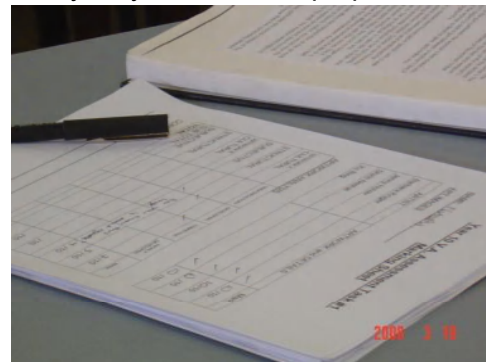
Year 10 V.A. Assessment Task #1
Marking Sheet

NAME: [Handwritten Name]

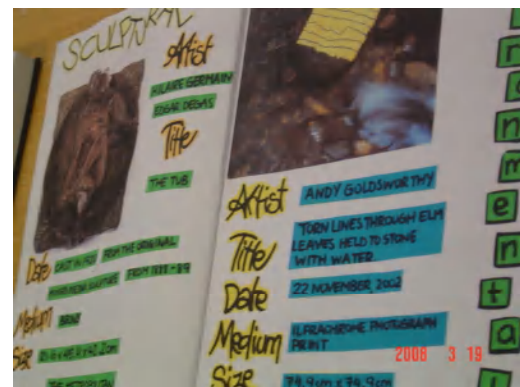
ARTIST	ARTWORK and DETAILS	Mark
Barbara Hepworth		75
Henry Moore		75
John Nashall		75
Ku Ring		75

ARTWORK ANALYSIS	CONCEPTUAL	TECHNIQUE	FORMAL	MARK
CONCEPTUAL				75
STRUCTURAL				75
SUBJECTIVE				75
CONCEPTUAL				75
STRUCTURAL				75
SUBJECTIVE				75
SUB-TOTAL				75
TOTAL				75

COMMENT:



(4) 作品及び活動の様子



① 油絵に取り組んでいる様子である。小学校では、扱うことのない題材であるが色彩感覚の違いなどを知ることができた。

② 授業中の課題は、自分で制作したファイルにポートフォリオしていく。しっかりとした積み重ねを見ることができた。

3 Balgowlah-North Public School

(1) 学校概要及び特色

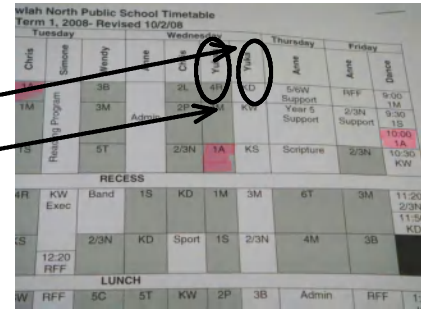
Balgowlah-North Public School は、シドニー郊外の Balgowlah 地区にある公立の小学校である。児童数は約 300 人 (2008 年 4 月現在) YearK~Year6 までの 20 クラスからなる学校である。

シドニーの公立小学校は、学校毎に様々な特色がある。音楽活動に力を入れたり、独自の教育活動を行っている。オープンデーとよばれている学校開放日には、保護者への説明会が開かれる。それによって、保護者は子どもが入学する学校を選択する。Balgowlah-North Public School は、日本語教育（文化）、ダンス等の活動に力を入れている。

(2) 時間割-Time Table -

学級担任制を基本的にとっているが、日本の小学校と大きく違うところは、極めて日本の中学校と同じような教科担任制に近いことである。

時間割（右：写真）を見ると、水曜日に"Yukari" "Yuka" という名前を見ることができる。"Yukari" は、土井由加里先生のことで、日本語指導をしている。"Yuka"は、柳沢由華さんのことで、日本の伝統文化を指導している。今回は、日本の伝統文化と現地の先生が指導する Art の時間に合わせて、訪問させていただいた。



(3) 授業風景及び作品



兜づくり Year5



日本の伝統文化 Year5

4 Sydney Japanese School

(1) ミックスレッスン

本校は、体育及び図工、音楽は日本人学級と国際学級に在籍している児童と一緒にそれぞれ週に4時間学習を共に行う。以後これをミックスレッスンと呼ぶ。

日本人学級の図工の時間はミックスレッスン以外にも、通年を通して各週でもう1時間設けている。そこで、日本の教育課程において不足している題材を取り上げていた。しかし、今年度より、その補充時間を増やしたことで、図工におけるミックスレッスンは、2・3学期のみとなった。さらに、私が担任している Year6 の国際学級は、Year5 の児童数が少ないために、複式学級 (Year5/6) となった。そのため日本人学級の Year5 と一緒に授業をすることになった。

それゆえに、日本人学級 Year6 は、図工のミックスレッスンの授業が通年を通してなくなった。そこで、現地校訪問をして得た情報を授業に生かしたいと考えた。

学期	月	単元・題材 (Mixed Lesson)	単元・題材 (Own)
1	4	/	ポスター作り
	5		学級旗作り
	6		遠近法を利用した絵①

2	7	アボリジナルアート	遠近法を利用した絵②
	8	オープンデーポスター	遠近法を利用した絵③
	9	モナリザのコラージュ	遠近法を利用した絵④
3	10	スクールコンサートロゴマーク	くねくねアート①
	11	染色 (Tシャツ)	くねくねアート②
	12	クリスマスカード	生まれ変わった板たち
4	1	/	木版画① (鏡の中の私, 思い出の SJS)
	2		木版画②
	3		木版画③

(2) 作品及び児童の変容 (くねくねアートより)

① 参考作品 (Balgowlah North P.S.)

平面の創作作品である。今年度、上記年間計画にもあるように、本校 Year6 も針金を主な材料として扱う題材がある。そこで、この作品を参考に立体作品の制作に取り組むことにした。

また、参考作品が針金だけを用いたシンプルなデザインなのに対して、他の材料も使い針金との調和を考えた作品に仕上げることを目的とした。



② 児童作品 (本校)

主な材料である針金に加えて、オレンジ色の和紙とビーズ (大玉) 使用した品ハロウィンをイメージしている。

③ 児童作品 (本校)

主な材料である針金に加えて、様々な色のモールを使用して、夜の輝く東京タワーを表現した作品。



図工東京タワー Year6-1

5 成果と課題

(1) 成果

昨年度の課題であった現地校に訪問して、授業を見せていただけたことは何よりの成果である。特に、YearK から Year10 まで2つの学校にわたり見ることができたことも良かった。また、年度当初に現地校を訪問したことで、授業に即生かすことができた。

取 Balgowlah-North Public School では、TT の Year1 の授業と Year3 の日本文化を学ぶ授業をみた。いずれも、参考作品や事前準備がしっかりされており、児童は集中して取り組んでいる様子を見ることができた。

公 Ku-Ring-Gai Creative Arts High School では、新入生に向けての公開日に訪問した。開日でありながら、教科担当の先生が評価をしているところを見ることができた。また、後日、評価だけでなく指導計画や評価基準なども教えていただくことができ、とても感謝している。

(2) 課題

評 High School の評価については、詳しくすることができた。しかし、Primary School については不十分であった。そこで、来年度は現地校 Primary School の指導計画と評価について研修していきたい。

あ と が き

ここに、2010年度の広報誌を第1号をお届けします。

会長の檜山美則校長先生、原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「今年はいくさんの先生方が在外教育施設から帰ってくる。たくさん原稿が集まりすぎて、広報誌が膨大なものになったら大変だな。」などと不安をかかえながら、メールを開きました。しかし、今年帰国された先生方も優しく、大した手間もかけずに、無事編集することができました。

集まった原稿の数を見て寂しく思うのは、私だけでしょうか。勿論、量より質が大切なのは言うまでもありませんが。しかし、よく考えてみると、あまり原稿が集まらなくなってきたのは、私の熱意が薄れてきたことの表れともとれます。今日から、心を切り替えて会の仕事や日々の仕事に取り組んでいこうと思いました。

また、日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとって、この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。この広報誌が、帰国された先生方には海外との接点に、そして在外教育施設に派遣されている先生方には、日本との接点になってくれればいいなと感じながら編集しました。

広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。ホームページアドレス <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス kouhouibakai@yahoo.co.jp (文責 河嶋)

参考作品 *Balgoulah North P.S. Year6*